

記
録

企画展「初代学長森戸辰男から見た『学問の自由』と『大学の自治』」

小池 聖 一

広島大学文書館では、平成二八（二〇一六）年一〇月五日から同月一六日まで、全国大学史資料協議会二〇周年の総会・全国研究会が本学で開催されるのに合わせ、広島大学中央図書館一階地域・国際交流プラザにて企画展「初代学長森戸辰男から見た『学問の自由』と『大学の自治』」を開催した。筆者は、一〇月六日の全国大学史資料協議会総会において、企画展と同じ題目で講演を行った。



広島大学長時代の森戸辰男
(広島大学文書館所蔵)

一、展示の企画

平成一六（二〇〇四）年の国立大学法人化から十年が過ぎ、国立大学は、運営費交付金の削減により競争的資金の獲得に狂奔せざるをえず、必然的に、基礎科学より応用科学に目が向きがちである。昨今、基礎研究の重要性は、ノーベル賞の「獲得」で測られ、その関心も一過性で、単なる「国威」に置き換えられるだけに終わっているのではないだろうか。また、交付金の削減は、「大学の自治」の財政的な基盤を崩すとともに、科学技術庁と合併してできた文部科学省が、競争的資金の設定により国立大学を強力に「指導」できるようになっている。しかし、その「指導」は、アメリカ等の先進国でAIの発展がこれまでの学問研究に変化を強要しているなか、より総合的な人間力を培う教育の重要性が最重視されているにもかかわらず、人文社会科学系学部の廃止や他分野への転換を求めた平成二七年六月の文部科学省通知のように、首をかしげたくなるものも多い。そうであるだけに、この国の教育・研究を改めて考えるうえで、「学問の自由」と連動し

た「大学の自治」について再検討することは重要ではないだろうか……。本展示は、まさしく、このような問題意識のもとに企画した。その際、本企画展の趣旨とは、次のようなものであった。

趣旨

広島大学初代学長森戸辰男先生は、戦前、森戸事件における思想弾圧事件の主役であり、「学問の自由」に殉じた被害者でした。そして、大学顛落論争を通じて、「学問の自由」と「大学の自治」を連動させて、当該期の思想状況に対峙した論客でもありました。戦後、森戸先生は、日本国憲法の制定に深く関わり、六・三制の導入にあたっては、文部大臣として実施にあたるなど、戦後教育改革の当事者でした。そして、「学問の自由」が自明となった戦後にあつて森戸は、「大学の自治」のあり方をめぐり、急激な変革を求める動きを抑制し、漸進的な改革を目指す立場にありました。

森戸先生は、明治四三（一九一〇）年七月、第一高等学校から東京帝国大学法科大学経済学科に進学し、大正五（一九一五）年に助教授となりました。専門は、ドイツ歴史学派にもとづく、社会改良主義的な「社会政策」でした。森戸事件後、森戸先生は、大阪の大原社会問題研究所に移り、女子労働に関する研究等を行うとともに同研究所の実質的な運営にあたりました。そして、大阪労働学校を中心に労働者教育を行うとともに、雑誌・新聞等で積極的な言論活動を行ったのでした。

一方、戦後の森戸先生は、文化人・社会党代議士として日本国憲法の制定に関与し、片山・芦田両内閣の文部大臣として戦後教育改革を行います。その後、広島大学長として教育の最前線に立ち、広島大学に「自由で平和な一つの大学」という建学の精神を根付かせたのでした。

森戸先生は、その後も日本育英会長等を歴任。中央教育審議会の主査・会長としても活躍し、「ミスター中教審」とも呼ばれました。昭和三八年（一九六三年）一月二八日答申「大学教育の改善について」（三八答申）、および、昭和四六年六月一日答申「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本施策」（四六答申）を主導し、戦後教育改革の再定着にも尽力したのです。

今日、大学、特に国立大学をめぐる状況は、大きく変化しつつあります。そのようななかであるからこそ、本展示では、広島大学初代学長森戸辰男先生を通じて、「学問の自由」と「大学の自治」について改めて問いかけることとしたいと思っております。

「学問の自由」と「大学の自治」との関係について、初めて世間の注目を集めることとなった事件は、広島大学の初代学長森戸辰男先生（以下、敬称略）を「被告」とする大正九（一九二〇）年の森戸事件であった。「大学の自治」に関しては、東京帝国大学・京都帝国大学が「自治」の慣行を積み上げてきた先進的存在であった（同時期に京都帝国大学文書館においても「大学の自治」をテーマとする企画展「京都帝国大学の「大学自治」」が開催された）。しかし、この問題を「象

「牙の塔」の内部のこととしてだけでなく、広く社会問題に通ずるものとして関心を広げ、戦間期、日本が戦争の時代へと傾斜するなかで大学が「顛落」したと指摘したのは、森戸辰男であった。そして、森戸は、戦後、廃墟と化した日本の文化国家としての再生を主張し、代議士・文部大臣として教育改革に携わり、広島大学学長としてその担当者となった。そして、戦後教育改革の再定着を意図し、中央教育審議会会長として昭和四十六年六月一日答申「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本施策」（四六答申）を主導したのであった。森戸は、戦前・戦後を通じて「学問の自由」と「大学の自治」の最前線に立ち続けた一人であった。

二、展示の内容

本展示は、以下の六つに分けて構成した。

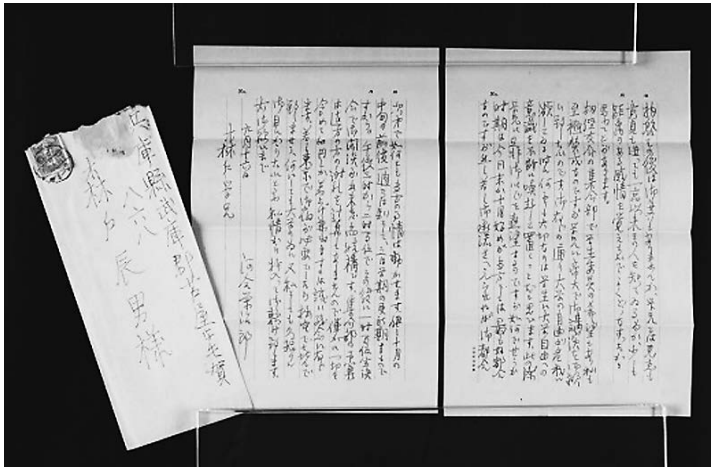
1. 森戸事件における「学問の自由」と「大学の自治」
2. 「大学顛落論」論争にみる「学問の自由」と「大学の自治」
3. 戦後の森戸と「大学の自治」
4. 森戸文部大臣期の「学問の自由」
5. 「学問の自由」をめぐる幻の国会質問案
6. 森戸から見た「学問の自由」「大学の自治」の戦前と戦後

「1.」では、森戸事件を取り上げた。森戸事件は、森戸が東京帝国大学経済学部の機関学術雑誌に「クロボトキンの社会思想の研究」と

題する論文を寄稿したことに始まる。その際、東京帝国大学法科大学経済学部の「自治」は機能せず、むしろ、「学問の自由」をめぐる問題としての様相を呈した。結果として、雑誌は発禁処分になり、森戸も朝憲紊乱罪で起訴され、禁固四箇月に処せられている。

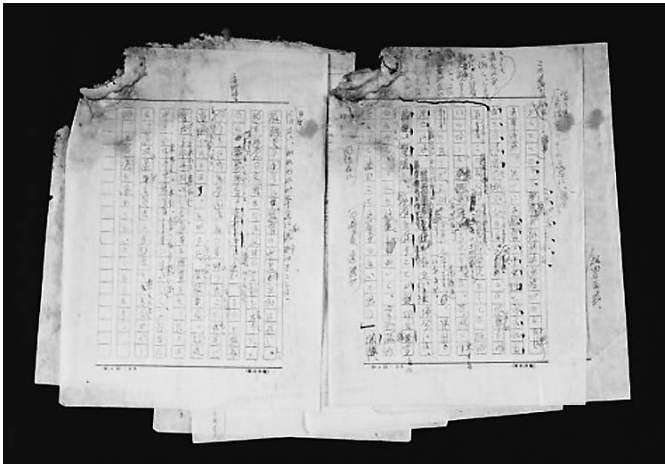


警察署への出頭命令書（広島大学文書館所蔵）



森戸辰男宛河合栄治郎書簡
(広島大学文書館所蔵)

「2.」では、河上肇京都帝国大学経済学部教授の辞職一年後の昭和四（一九二九）年に、京都帝国大学で行った講演に始まる河合栄治郎東京帝国大学教授との「大学顛落論」論争を取り上げた。「自由主義」と「マルクス主義」の対立とされる本論争は、実に堂々たるものであった。そうであるがゆえに、昭和八年の瀧川事件以降、思想弾圧の対象が自由主義へと広がるなか、森戸は、これを「大学顛落」の新段階と

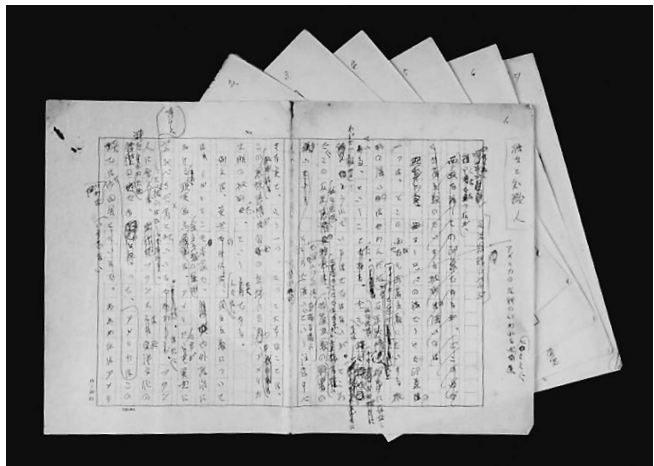


国会質問案
(横浜市所蔵「森戸辰男関係文書」)

し、果敢な軍部批判を展開していた河合との連携を主張したのであった。具体的に、昭和一〇年一〇月、東京帝国大学経済学部・経友会の招きに応じて「教学の刷新と大学の自由」と題した講演を行った。当日、司会を務めたのは河合であった。森戸の二高（雄弁会）・東大の一年後輩でもある河合は、講演前の九月一六日、森戸に真情あふれる書簡を送っている。

「3.」では、戦後、日本の再興を文化に託した森戸の足跡を追い、「4.」では、森戸文部大臣期に、「学問の自由」は、当然のこのように日本憲法第二三条として盛り込まれた一方で、「大学の自治」をめぐり学生運動が勃興しつつあることを説明した。「5.」では、横浜市所蔵森戸辰男関係文書に所収されている「幻」に終わった森戸の国会質問案を紹介した。森戸は、「教育の中立性」を主張するにあたり、「自治と自由を堅持する大学と教授会は、上からの圧力にたいしてと同様、横からまたは下からの圧力にたいしても、学問の自由を守るべき確信と勇気を持つべき」と述べている。

そして「6.」では、戦前、「学問の自由」を守るべき大学が「大学の自治」の名のもとで自由を失っていったこと。戦後は、「学問の自由」と「大学の自治」が当然のように与えられたなかで、大学に対する圧力の在り方が「上から」だけでなく、「横」「下」と多様化した。それだけに、森戸は、「学問の自由」と「大学の自治」を維持するために「勇気」と「確信」を持つべきとの自説とともに、河合が説いた「自由」をも合わせて、戦後の「知識人」に求めたのであった。以上が展示の概要である。



森戸辰男「独立と知識人」原稿（掲載は『毎日新聞』昭和29年1月6日）横浜市所蔵森戸辰男関係文書

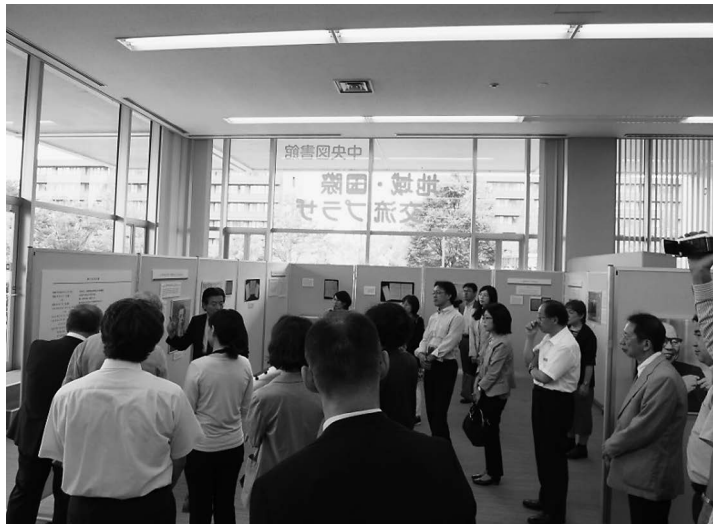
本展示は、写真パネル一二、説明パネル一二、書籍七という小さな企画展であった。本来ならば、より多くの資料について実物を展示したかったのだが、会場となった中央図書館地域・国際交流プラザは、施錠できないオープンスペースのため、実物展示については断念せざるを得なかった。また、写真・説明パネルとも、少々小さく、見にくくなってしまったことは反省点である。

本展示は、「学問の自由」と「大学の自治」についての「今」を考

える一つの契機となればとの思いから企画した。国立大学への要求は、少子化と財政難が理由であるが、自民党・小泉純一郎首相が「米百俵の精神」（明治維新後の旧長岡藩が将来に向けて教育に投資した）を標榜していたことも思い出してもらいたいものである。森戸辰男は、新渡戸稲造の意志を継ぎ、教育の機会均等を生涯の目標とし、外に開く学問を常に意識した研究者であり教育者であった。その一端は、現在の広島大学西条キャンパスが権威主義的な扉と門を持たず、外に開かれていることにも表れている。この点については、今後、広島大学という場において改めて展示を企画したいと考えている。なお、本展示の内容については、拙稿「学問の自由と大学の自治をめぐる戦前と戦後」（『日本歴史』第七七二号（平成二四年九月））及び講演の記録「森戸辰男における『学問の自由』と『大学の自治』」（『全国大学史資料協議会 研究叢書』第一九号（平成二九年一〇月発行予定））を参照いただければ幸いである。

最後に、本企画展は、企画・パネル原稿作成・配置案等を筆者が担当し、事務業務については石田雅春准教授が担当した。パネル作成・設営は中村工社（株）に依頼した。担当の森岡緑氏にはお世話になった。ここに記して感謝する次第である。

（こいけ せいいち・広島大学文書館）



展示風景